



Title	作品が修理できなくなったとき
Author(s)	福元, 崇志
Citation	a+a 美学研究. 2017, 10, p. 136-141
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90168
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

作品が修理できなくなったとき

美術館において、作品はあたうかぎりの延命処置をほどこされる。作品を過去の遺物として後世にのこすため、いつかおとずれる物理的な死は、いつまでも回避されつづけなければならない。だが、こうした永遠の生を約束（ないし強制）する場、とりわけ現代美術を扱う美術館という場にあつて、このところ、寿命にあらがえない作品の存在が目立つようになってきた。たとえばダン・フレイヴィンの、蛍光灯をもちいた彫刻。世の照明がLEDへと移行し、蛍光灯の生産が打ち切られたとき、作品は交換部品を調達できず、早晚死を迎えることになる。修復が修理・交換にとってかわられるこの事態は、数多くの映像作品にもあてはまるだろう。そのとき問題となるのは、寿命をまっとうした作品の取り扱いである。故障した亡骸を、失われた文化の痕跡としてなおも公開すべきか、それとも文字どおり死蔵するべきか。美術館はいま、作品の物理的な死をめぐる問いに直面している。

福元崇志（ふくもと・たかし）

国立国際美術館研究員。専門はドイツと日本の近現代美術。





